

初期土偶から中期土偶への展開を読み解く

—精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—

瀬口眞司

目次

1. 序論
2. 本論
3. 結論と展望

— 論文要旨 —

縄文時代の初期土偶から中期土偶への展開を主題に据え、その認識の更新と深化を試みた。

土偶には、①顔のない土偶と、②顔のある土偶の二者がある。①は「依代としての土偶」であり、霊的存在がまだ取りついていないので、顔は表現されていない。その代わり、その造形の上端部付近には、霊的存在が取りつくための重要な要素として〈うつろ〉が必ず表現されていた。かたや②は「精霊像としての土偶」であり、霊的存在が取りついているので、顔が表現されている。時期的に見ると、①は初期土偶の段階から存在し、②は中期以降に本格的に付加されるようになったことが分かっている。また②はその後、爆発的に増加したことも知られている。

本稿で問題にしたのは、上記②における依代的な要素の有無である。「精霊像としての土偶」は、依代的な要素をもたずに爆発的増加を果たしたのか、あるいは依代的な要素もまだ併せ持ちながら展開したのか。この問題の解明は、土偶祭祀の展開を読み解いていく上でも重要な作業となる。

そこで本稿では、依代としての重要な要素——霊的存在が取りつくための〈うつろ〉表現——のあり方に着目した上で、その〈うつろ〉表現が「精霊像としての土偶」にも継承されているのか／否か、継承されているならば、どのような展開をもって受け継がれていたのかといった点を問うた。

検討の結果、〈うつろ〉表現は、様々なバリエーションを派生させながら「精霊像としての土偶」にも脈々と受け継がれていることが確認できた。また〈うつろ〉表現が配置される部位についても、当初は頭部前面だが、中期土偶の段階に移行する前後の時期に頭部上面へ転移し、さらに背面へ再転移していく展開も見出せた。

以上のように、「精霊像としての土偶」は依代的要素を廃したものではなく、依代的要素も併せ持つものとして展開していったことが理解でき、顔面を取りつける／描くという製作作業を通して霊的存在がインストールされたものではあるが、使い手が使用する段階においても、依代として霊的存在を取りつかせられる作りになっていたことが認識できた。精霊像として完成された造形であるだけでなく、霊的存在を幾重にも取りつかせられる依代でもあったことになる。以上の検討により、土偶祭祀の実態と展開を読み解いていく上で、重要な認識の更新と深化ができた。

キーワード

縄文時代 土偶 意味・役割 初期土偶 中期土偶 展開 依代 精霊像